

授業時 一人一人に応じた発問をする

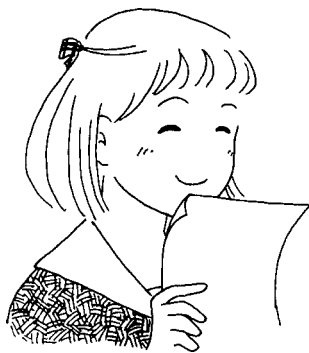
校内研究授業当日、N教諭はこの日のために綿密な教材研究を行い、学習指導案も何度も検討していた。導入もスムーズに進み、本時の目標に迫るための発問を提示した。「さあ、この場面で、主人公はどんな気持ちだったでしょう？」

子供たちの活発な発言を期待して待ったが、誰も挙手しようとしていない。あまりの反応のなさに、N教諭は立ち往生してしまった。その時、最前列のOさんが「いろんな気持ちが…」と小さくつぶやくのが耳に入った。N教諭は、はたと思い当たった。

「ああ、今Oさんがよいこと言ってくれたよ。この場面では、主人公の気持ちがいろいろ出てくるんだね。じゃあ、まず気持ちが表れているところはどこか、その部分に線を引いてみましょう。1ヶ所じゃないかもしれませんよ。」と発問を切り替えた。

戸惑っていた子供たちは、鉛筆を手に一斉に教科書の文章を読み返し始めた。N教諭と目が合ったOさんが、はにかみながらうれしそうにほほえんだ。

N教諭は、なかなか鉛筆の動かない子供への次の発問を考えながら机間指導を始めた。



しっかりと教材研究をし、発問や教材を用意しておくことはとても大切なことです。しかし、実際の授業の中では、事前に用意した発問をするだけでなく、子供の反応を生かし、授業を組み立てていくことが重要です。

子供の反応を取り上げた発問をする

子供の発言やつぶやきをどのように取り上げ、どのように取り入れていくかということは、授業を行う際の大事なポイントです。

事例では、「いろんな気持ちが…」というOさんのつぶやきを取り上げ、教師は発問を切り替えています。

教師がよい聞き手となり、子供の発言やつぶやきを拾おうという気持ちをもち、それを生かす発問をすることで、子供は主体的に授業に参加できるようになっていきます。

「開かれた質問」と「閉じられた質問」をおりませる

「開かれた質問」とは、「どう思う?」「どうしたい?」など相手の考えや気持ちを問うものです。「閉じられた質問」とは、「右か左か?」「何番目か?」など選択させるものです。

「開かれた質問」と「閉じられた質問」をおりませながら授業を進めることは、一方的に指示をするかたちよりも、できた喜びや自分で発見したという満足感を子供たちに与え、学習意欲の向上に結びつけることができます。